



ガリヴァーの森文庫 02

危ない中国、  
何も知らない  
中国人  
福堀武彦

ガリヴァーの森文庫02

危ない中国、  
何も知らない中国人

福堀武彦



## まえがき

私が『あなたの知らない中国社会』を出版してから、一年が経った。

この間、私自身が心配したこと、即ち私が誰であるかの犯人探しとそれに伴う批判及び中国による退去ということは起こらなかった。私としてもトラブルが起きないように細心の注意を払ってきたこともあるが、中国も徐々に開かれた社会？ になりつつあるのか。

こうした理解はやや早計である。権力は何にもまして肝要であると、私は『あなたの知らない中国社会』で書いた。このことは政治学では極めて当たり前のこと。自己の権力が確立している間は、社会でも会社でも家庭内でも、それぞれの範囲内では権力は普遍的に及びその権力の影響下にある。

しかし、もし自らの権力基盤が危うくなると、権力者は刹那的になるか、自暴自棄になるか、はたまた権力を武器にしてやりたい放題に走るか、疑心暗鬼になり暴力を振る

うか、さらに今では躁鬱病になるか、現象面では様々な症状があるが、何れにせよ、ろくなことは起きない。

その意味で、中国は地球社会の中で少し大人になったのか、世界に対する対応の下手さ加減が少し上達したのか。オリンピックも終わり少し落ち着いてきたのだろうか。

この先、まだ上海万博がある。オリンピックに比べれば、経済、文化的な要素が若干強い反面、政治的要素が少ないので落ち着いた感じであろうか。折からの世界的不景気ということが影響しているのかも知れない。何れにせよオリンピックの成功により自信がついたのは確かであるが、私はこの自信が傲慢にならないように、中華思想が強化されることのないように祈るだけである。

今回は、前著では書き残したこと、書けなかったことを追加して、改めて中国での業務を考えて見たい。前著はボリュームがありすぎて、ページが二段組になり、字も細かく、価格も若干高かったので批判を受けた。内容的には、直接批判を言ってきた人はなかったが、反省点である。

今回も関係各位の様々な協力及びアドバイスを得たので、事前に関係者に謝意を表したい。

## 目次

## 一、過去と現在の狭間で

1、北朝鮮	10
2、輸出管理／中国国内販売	16
3、社会主義	19
4、マスコミの報道の仕方	22
5、法律	31
6、留学生	35
7、経理（会計）	40
8、大会社	43
9、現地社員を信用するということはどういうことか	51
10、古いニュース、古い本を読む	54

## 二、現在の中で

- |                 |     |
|-----------------|-----|
| 11、優秀な技術者は非友好的？ | 57  |
| 12、友好で商売は出来ない   | 63  |
| 13、カラーテレビが映らない  | 65  |
| 14、商談中の空き時間     | 68  |
| 15、中国の人は例え話が好き  | 72  |
| 16、民主主義の社会になると  | 74  |
| 1、建設現場          | 79  |
| 2、幽霊ビルその後       | 84  |
| 3、与信限度          | 90  |
| 4、中国政府からみた駐在員   | 93  |
| 5、現場から見た駐在員     | 98  |
| 6、出張では見えないところ   | 102 |

7、製造技術者	104
8、開発能力	107
9、ジョブホッピング	109
10、中国のリスク	115
11、第29回オリンピック	123
12、災害	132
13、入院始末記	138
14、人材採用	143
15、自衛能力	150
16、危機管理（マスコミの報道の仕方／中国の報道の仕方）	154
17、どこにでもいる良い奴、悪い奴	157
18、現在の社会で育つ、資本経済の中で育つ青年	160
19、あえぐ中産階級	163
20、「有関係」の社会	168

## 三、未来に向けて

- 1、 共産党独裁の国？ 中国の未来……………174
- 2、 中国の指導者の思い……………184
- 3、 工会……………187
- 4、 産権……………193
- 5、 中国の権力社会……………196
- 6、 台湾問題と領土問題……………199
- 7、 独裁主義の中の資本主義……………202
- 8、 中国批判に対して……………204
- 9、 中国経済（社会）の行方……………207
- 10、 文化の違い……………212
- あとがき……………217

## 一、過去と現在の狭間で

### 1 北朝鮮

初めて北朝鮮に行ったのは一九八〇年代の半ばであった。ある友好商社所属の名義で北朝鮮系の商社経由でパスポートを申請した。当時は、パスポートは北朝鮮とキューバの両国は、普通のパスポートでは行けなかった。(ついでに言うが、当時は中国大陆に行った人は、そのビザのはんこがついたパスポートでは台湾も行けなかった。)

パスポートを変更する為に従来のパスポートとは別に一回限りのパスポートを取得する必要があった。そのパスポートでまず中国行きビザを取得し、いったん中国の北京に渡り、北京の北朝鮮大使館(中国は北朝鮮とは国交があり、しかもアメリカとの朝鮮戦争以来の特別な友好国である。)で北朝鮮行きのビザを取得し、翌日北朝鮮に向かうことになる。

何をしに行ったかと言うとテレビの組み立てラインの販売であった。心の中ではこの仕事はうまく行かないということには分かっていた。当時のコム規制があったからだ。しかし、どんな国だろう、見たこともない神秘的な国という関心もあり、一度行って見たい国であった。

手続きをした上でサンプルのテレビを持って技術者を含めて三人で行った。テレビは翌日、北朝鮮に持っていくので北京空港に保税のまま預けて、翌日ピョンヤン行き飛行機に積み込んだ。トラブルは何も起こらなかった。ピョンヤンの飛行場でも商談という事で何の手続きもなくそのまま持ち込めた。

飛行場から所定のホテルまでは、朝鮮側の受け入れの顧客の按配した高級車ベンツで直行した。思ったより広い道で快適であった。

何分かかったかは覚えていないが、程なくして着いた記憶がある。

当時のピョンヤンは結構自由でパートや市内のレストランは自由に行けた。

勿論、後をつけられていることは覚悟のうえであったが、特に行動に制限は受けなかった。

日系朝鮮人との合弁のデパートもあり、食堂もあり、又、日本食に似た日本食を食べられる食堂もあった。毎日のようにホテル以外で食事をした。

商談は、顧客の用意した車で、顧客まで行ったが、案の定、上手くいかなかった。理由は組み立てラインに使用する計測器を相手が希望し、それを販売することが出来なかったからだ。それでも、顧客の技術者は日本語が出来、しかもココムのことは良く知っていたので、購入できないことの了解は得たが、組み立てラインがどのようなものなのかは理解できたようだ。(これもノウハウということで、厳密に言えばかなりリスクキーな説明で法に抵触しないよう相当に気を使った。)

商談がない日は、ピョンヤンの金日成が生まれた場所や市内の見学となったが、驚いたことに、市内には地下鉄があり、電車には殆ど乗る人がいないものにも係わらず、自動券売機が駅に備わっていた。これは中国の無償援助で設置されたものであり、地下鉄自体も中国の援助であった。自動券売機というものが中国にもない時代に、である。この謎は、その後読んだ『誰も知らなかった毛沢東 マオ』(張 戎／ジョン・ハリデイ著)の中に記述が見えるが、毛沢東が中国をめちやくちやにしている間にも、中国寄りの国

には多大な援助をしていたからであった。その中には北朝鮮に「自動券売機を援助した」とは書いていないが、「さもありなん」と思われる箇所が出てくる。

ピョンヤンには、ドルを持参したが換金は旅行小切手（T/C）よりも現金の方が交換率が高かった。やはり自由圏から孤立していた関係上、現金が欲しかったのと思われる。

当時の北朝鮮は、今から思うと現在よりまだ生活に余裕があったと思われる。その後、私の北京駐在時代以降、ある駐在の商社の人が中国の休みを利用して北朝鮮に旅行したが、その駐在員が過去に比べて貧しくなった、と言っていた。その駐在員は、八〇年代にも北朝鮮を訪問した経験があったと言う。

今回、北朝鮮に行った話を書いたが、何処の社会にもある一線を越えない限り安全な社会というものがあり、一線を越えようとするとかかなりの障害が生じる。

先ず一回限りのパスポートを申請したその日の午後、韓国の商談相手や、韓国で知り合った友人から国際電話が頻繁にかかってくる。

「今度、北朝鮮に行くんだってね」

「何しに行くの」

何故分かるのだろうか。私は彼らが持っている情報網に驚いたものだ。常に私は監視されている。これは、北朝鮮系の商社や日本の官庁に情報系の人がいるに違いないと思つた。それは中国に行つた時使用したパスポートで初めて韓国に行つた時だ。

韓国の金浦空港で入国審査の際、何処に行くのか根掘り葉掘り聞かれたことがある。喫茶店で尋ねてきた顧客と打ち合わせをして、その顧客の会社を訪問した際、他の顧客からその顧客のところにアポイントの依頼の電話が掛つてきた。どうして分かるのだろうか？ その顧客に聞いてみたが、「分かるのです」と言うばかりで実際は教えてもらえなかつた。

北朝鮮から帰つて来ると、今度は日本の自衛隊、警察、法務省から入れ替わり立ち代り連絡があり、北朝鮮の状況を聞かれた。私が金日成の故郷を訪ねた際にバカチョンカメラで撮つた写真を見せて欲しいとか、現地で入手した宣伝パンフレット（日本の北朝鮮系の本屋でいくらでも手に入るもの）を貸してもらえないかとか。聞くところによるとカメラの種類と写真を見れば、距離間、方向が分かるらしいのだ。又、日本政府関係

の人が北朝鮮系の本屋に入ると後をつけられていて、いろいろ詮索されるらしい。

更に、その後韓国の顧客に商談で行くと、各会社の幹部からもいろいろ聞かれた。

「社会主義は科学であり、我々も科学として北側に現実として存在している社会主義地域の事情を知りたいのだ」という理由で。

私が話すことは、全てKGBに筒抜けということを知りながら話す羽目になった。もちろん北朝鮮にも筒抜けである。これが前提になれば、自然と話す内容にも気を使わねばならなくなった。

私がここで書きたいことは、異なる体制を訪問する場合、そこでただ日常生活を送れば良い、日常の業務をこなしていれば良いというだけでは済まないということだ。何かの業務を行うということは常に体制の陰が後ろに見え隠れている。業務を上手くやるためにはその認識を持ち、個々の問題点を解決していかなければならない。単なる観光客のような善良な人というわけにはいかない。科学者が純粹に科学を研究していれば良いという時代ではないことと同じである。自分が研究した結果が何に使用されるかも考えながら研究せねばならないのと同じように商売の道を一步間違えれば、とんでもないこ

とになるということ、その国の背景、文化が分からなければ、求められる結果が出ないということになる。単なる善良な社員は運が良いか、偶々扱っている商品に問題（欠陥という意味ではない）がないというだけの偶然に過ぎない。

何れにせよ、北朝鮮に行ったのはこの一回限りである。

## 2 輸出管理／中国国内販売

中国も戦略物資に関しては輸出管理が二〇〇七年からしっかりと行われるようになった。法的にも整備されつつあるが、販売先の地域に対する規制についてはまだ曖昧である。日本やアメリカが輸出管理を行っている場合、その主体は輸出側であり、中国側の事情や異論は通らない。それでも戦略物資の調達が頻繁になれば、中国側にも輸出管理の必要性が生まれ、早急に整備しなければならぬ。日本が行っている思想はあくまでも自由主義陣営として、アメリカの考えが主体となつて行なわれている。中国から見れば自由圏の輸出管理をするということは中国に味方する国に対してもアメリカ流の輸出管理をすることになるが、異論を唱えてばかりいられなくなった。中国自身にとって

も戦略物資の輸出管理を行なう必要性が出てきた為、整備しなければならない現実が出て来たのである。それは、友好国と言えども時代が変れば敵対国に変わる可能性があるからである。

しかし、アメリカが禁止している国対国の輸出入とは別に、地域に関しては、必ずしも見解が一致しているわけではない。北朝鮮は、中国にとっての友好国であるから、同じような輸出管理ではなく、別の政治的施策があり、例えば、武器そのものの禁輸国ではない。

このことは、絶対に忘れてはならない。

私たちが中国で作る商品はたとえ戦略物資ではなくとも、中国国内で販売する以上、その商品が回りまわって北朝鮮に行くことは避けられない。回避する手だてはないということだ。だから少なくとも直接販売しない、ということが精一杯の防衛。中国にある会社は中国の法律に基づいて商活動するのは当然。中国の社員に向かって、北朝鮮はアメリカがテロ支援国と指定したからと言って輸出するなどに言うことは、たとえ一〇〇%の外資会社であっても理論上無理がある。ただ、中国もアメリカとの経済的な関係

が強まれば強まるほどアメリカの思想を無碍むげに否定できないだろう。

では、ここで働く私たちはどうすれば良いか、である。

一番社員にも通りが良いのは、会社には株主がいて株主の資金で会社を経営しているから、アメリカ政府や日本政府の意向というよりも株主の意向を聞かなければならないということの説明するほうが良いと思われる。この説明の良いことは、株主を表に立て、日本企業が直接中国を批判していないということ。朝鮮族や中国人の感情を直接損なわない点である。第二に中国にも朝鮮族がおり、その朝鮮族には北朝鮮に親戚がいる人もいる。加えて、私の会社規定には民族による採用制限をしてはならないと規定されている。従って朝鮮族も入社する機会があり、その朝鮮族の家族が朝鮮にいる可能性もある。中国での商活動は、その意味で非常にデリケートなのだ。

何れにせよ、輸出管理に関わる問題は、中国国内の日本企業としては非常に政治的に密着した問題であり、その発言や行動に対して、一段と注意すべき問題である。

中国及びそこにいる中国人と少数民族に関して様々論じることが政治的に極めてデリケートで、危ないと認識すべき。したがって私は、中国人の個人としての業務能力に関

わる問題のみを論じることにする。

中国は優れて政治的な国だ。このことを私の前書『あなたの知らない中国社会』で詳しく触れたので、簡単に理解してもらえと思う。

### 3 社会主義

先程、北朝鮮の項で韓国の人から社会主義は科学であるということと言われたということを書いたが、現代の中国の若者は社会主義の国の中に生きていながら、どれだけ社会主義理論を勉強したのだろうか。日本でもソ連が崩壊した頃から社会主義という言葉が消えるか、忘れ去られ、大学の講義でも専門分野とする以外は殆ど勉強しなくなっているのではないだろうか。聞けば、大学入試で世界史が殆ど選択されない傾向であるし、言葉そのものを知らない人が増えているのではないか。

社会主義は科学と言ったが、科学と人間の欲望は別物。人間の欲望は際限がなく、豊かな物資に恵まれ、誰もが満足できる社会の実現にはほど遠い。つまりマルクス・エンゲルスが書いた共産党宣言の通りにはなっていない。社会的発展のないまま、力で社会

主義制度をとりいれ、独裁の形態をとりながら現実の社会主義が進んできた結果、宗教、民族を未だに止揚できないでいる。その結果、ソ連の崩壊というシナリオを生み、社会主義が資本主義に負けたことになった。

しかし、勝った資本主義国も制度の中心は、資本主義制度であるが、その制度の中にも社会主義的な要素を取り入れている国家が殆どである。中国も社会主義市場経済なる言葉を作り出し、社会主義体制の中で、経済的には資本主義を実行する実験を行っている。ただ独裁の怖いところは、既に「すばらしい新世界」や「一九八四年」に述べられているが一步間違えれば、情報操作により、大衆は政治的独裁権力の道具と化することも忘れてはならない。

中国は社会主義制度を借りてその中で資本主義を経済面で取りいれ、独裁主義（この内容に関しては拙著『だれも知らない中国社会』を参照）を貫いている。日本でもバブル期の頃は、「土地」の概念に価値があるという思い込みの価値と本当の価値を混同し、砂上の楼閣を築き、拝金主義に陥った。それは人間の欲望が計り知れないということをも物語っている。

人間は豊かになれば更なる豊かさを求めて活動する。その豊かさは物質であれ、精神的なものであれ、とどまるところを知らない。鄧小平が先に豊になるところから豊かになり、徐々に内陸を豊かにしていけば良いと言ったけれど、実際に政府が動かなければ、人々は自分たちの血と汗で稼いだ金を無償で内陸には送りたがらない。これが普通である。結果的に中国政府が優遇条件等を出して企業を内陸に誘致し、誘導せざるを得なかった。上海市は、上海で稼いだ金を政府を經由して内陸に投資することは、上海閩のトップが中央に上がれることを条件に国家中央に納税という形で貢いだだが、一般庶民は上海を更に発展させる為に投資するのであれば歓迎であるが、そうでない場合は快く思っていないのが大半である。しかし、逆らうことが出来ないまま心に不満がたまるばかりであった。

日本でも地方の活性化を目的に一度下がったガソリン代を上げたり、自動車税を一般財源化するかしらないかでもめている。中国を見て逆に日本を思い出す。

私は、一九八九年から一九九五年まで家族と共に北京にいたが、家族は中国そのものが本当に好きになったかは別にして、中国には親近感を持っている。しかしその妻も外

国で生活をしてみて逆に日本が良く見え、日本の政治もたいしたことややっていないと感じるようになったようだ。暮らしの内にいるのと外にいるのでは、見方が大分異なってくる。

#### 4 マスコミの報道の仕方

北京にいる頃の話。新聞記者も交えた中国での実務の勉強会をしていた。愛新覚羅溥傑さんが顧問（後に愛新覚羅顕琦さんに交代）の「水曜会」という名の会であった。この会のルールはここで知った事実を記事にしないということ。この会に参加していた記者は真面目に会の趣旨を理解し守ってくれたが、一般には守ってくれない。最近では忙しくなるにしたがって、なかなか人が集まらず、また音頭をとる人もいなくなったので会そのものが消滅したようだ。

但し、この会に参加していなかった新聞社の場合と新聞記者の場合は注意を要した。私の事務所にも絶えず新聞記者から電話で質問が飛び込み、私は、電話では一切ノーコメントで通した。これも難しい。ノーコメントであるならば、ノーコメントと答えたと

記事にされるからだ。私の場合、そこにどんな背景があつてどんな内容の記事にするかを確認した上で回答する。

私の知っている会社の総経理がある新聞記者から電話で取材を受けて、迂闊に事実を事実として認める発言をした。内容は「貴社は○○会社と、△△の取引がありますね」と事前にかなり調査をした上で、その事実確認のみについて電話をしてきたのだ。その総経理が事実を事実として認めた翌朝の新聞では○○会社は中国の軍需産業と関係を持つっていると、でかでかと新聞の一面に出た。内容を読むと既に原稿が出来ていて、一部事実確認がされていない部分のみを全体の説明をその会社にしないまま回答を得て記事にした感があつた。中国を知っている人が見れば非常にこじつけに近いとすら感じた。回答した商品が軍需産業と係わりもないのに、記事の中ではその中国の会社と取引があるだけで全体が軍需産業とあたかもかわりがあるような書き方であつた。記事になつた取引のあるその会社は会社というよりは中国政府そのものであり、日本で言えば日本の政府の「省」であつた。

その「省」は当時の電子工業部（現在は信息产业部）である。この「省」は情報・通

信及び電子産業を中心に行政を行っているところであるが、全ての独裁国家や社会主義制度を取り入れている国では、何処の部門も全て軍関係と密接なかかわりがある。この「省」と係わりがあるということだけで全て軍に協力したという記事を書かれては、まず中国と取引が出来なくなる。

この新聞社の記者は、最近中国に来たばかりで特ダネ記事をあせったようであった。あまり中国との取引の現実を知らないまま着任したようだ。結果的に記事を書かれたその会社の責任者は日本の本社からキツイお叱りを受けたとのこと。その責任者は、このことがあった後、新聞記者とは一切の係わりを持たなくなった。

私にも友人や大学の同窓生で新聞記者が多くいるが、小職には殆んど接触がいつの頃からなくなつた。勿論、友人たちや同窓生たちは同じような年なので、私と接触して記事を取る必要がない地位になつたか、それとも会社が変わつたか。あるいは既に新聞記者を引退をしてしまったのか。何れにせよ、その年代にあたるからかも知れない。否、そればかりではなく、私自身が、新聞記者に追い立てられるような地位でなくなつたからかも知れない。若い頃の私は、友人の新聞記者と好き勝手に討論をした、そのことが

原因としてあるのかも知れない。

その討論は、新聞記者はサラリーマンであるのかないのか。事実報道は客観的か否か、が中心になる議論だ。新聞記者の出世は如何なるものか？ 地位が上がるといふことはどのようなことか？ 細かいことを相手は言わなかったが、やはり良い記事をどれだけ書いたか否か、特ダネをどれだけ書いたか否かが中心になる。では良い記事とは何か？ 私には分からない。

社会的正義を、事実をどれだけ書いたかなのであろうか。では事実とはなにか。

これは社会主義体制の中で長年仕事をしていると分からなくなる。事実とは自分の目で見たことだけを意味するのか。恐らく人が知った事実は、ある事実をどのように受け止めるか、その事実が発生した場所以外でどのような事実をどれだけ見てきたかによって、事実の受け止め方が変わってくる。新聞記事も事実の羅列しか書かないのでは記事に面白みがないので、自分の目で見た事実を自分の経験と自分の能力で、自分の表現で書くことになる。そして見た現実を何処まで書くか書かないか（伝えるか伝えないか）、その結果、事実個人の考え方が入り、事実そのものを表していなくなることもある。

し、一部の事実になってしまう場合もある。たとえそうであって、それを読む人に大きな影響を与える。そのことを記者自身が深く認識していないと、事実から導き出される結果が異なってしまう。

また、記者が記事を書いても、どの記事をどのように採用するか、見出しをどのようにするか、新聞社にもそれなりの規則があると聞く。テレビにはテレビの規則がある。

新聞記者は出世を望まないか？ 否。新入社員は事実を報道する為に入社するのであるが、時間と共に事実中心よりも出世や給料にも重点が移るのではないか。このようなことを率直に突っ込むので煙たがれた、ということもあるだろう。

事実という点で、新聞とは異なるが一つ例を挙げる。第二次天安門事件（一九八九年六月）の際に、天安門広場で人民解放軍の戦車が広場のテント村を襲って人民をひき殺した、と報道されたことがある。結果的にBBCも一年と経たないうちにその事実は映像に写っていなかった。NHKも数年遅れてその事実を認めたという記事が小さく新聞記事に載った。

確かに映像だけを見ると戦車がテント村に突っ込んだ映像があり、その映像を見た人

は当然、中にいる人を踏み潰したかに見える。あるいはそのように思い込む。その映像にはテントの周りにも人がおり、他のテントの中に人がいることも映っている。また、その他の地域で戦車と人民が戦ったという報道を同時に聞いている。人間の耳と脳は他の事実とあわせて見たものを判断している可能性が高い。映像とは恐ろしいものだ。

私はここで映像に写っていないなかったという事実をもって、その事実がなかったとは言っていない。ただその事実があれば、おびただしい血がその場に流れていたはずだ。その報道を私は耳にしていないだけだ。

新聞は本当に事実を伝える公器であるのか。事実を伝えるというのであれば、本当に中立か？ 中立ならば何故いろいろな新聞社があり、その新聞社の考え方に違いがあるのだろうか。「事実」はだれがどのように見ても一つであり、同じであるはずだ。しかし、新聞記者はそれぞれ異なる会社に属している。事実の捉え方が会社によって異なっている。従って、同じ事実であっても、表現が異なる為、または同じ事実を新聞記者の経験や能力から違った角度から見るので読者は違った事実があるように見える。本当に事実が一つであれば、全ての新聞記者が書く事実は同じであるはずだ。しかし、それな

らば新聞社は何社もいらぬ。私の言いたいことは、新聞記者に気軽に事実の報道をしていると言つては欲しくないのだ。

中国の新聞記者は、国益の為に記者活動を行う。国益になる事実のみを報道する。政府が事実あるいは情報と判断した事実のみを報道する。日本の新聞記者と違ふと言われている。従つて、自分たちが国益の為に記事を書くので、そうではない社会の新聞の精神は理解できない。自分たちの判断から他国の新聞記者も同じと考える。即ち、中国の新聞記者は他国に出ればスパイ活動を実行している可能性が高い。その為に、中国は外国から来る新聞記者をスパイと思つてゐる。従つて、外国の記者の中国国内の活動を制限してゐる。

現在は、私が北京に常駐してゐた時代（一九八九年〜二〇〇五年）と異なり、だいぶ開放されたが、当時は私たち民間の企業人のほうが自由に地方の企業に行けた。新聞記者はいちいち何処に行くか、どんな記事を書くのか申請して許可を取る必要があつた。いまではその許可もだいぶ自由になつたが、一方、ビザの種類が新聞記者と私たち民間の企業人とは異なることになつた。

新聞記者も人間である以上、様々な考え方を持っている。日本ではそれが許されている。逆に言えば、様々な考え方を持っている以上、彼が報道する記事には彼の考え方が反映されると言うのが普通である。本当の意味での中立とは言えない、ということだ。

私は、各種報道が中立であり、報道された事実が全てとは考えていない。(嘘があると言っているのではないが、最近は捏造記事ややらせも摘発されているので、嘘の報道もあることになる。)

二〇〇八年はギョウザ問題とオリンピックや四川省の大地震等、報道にはこと欠かなかったが、ギョウザ問題も中国のずさんなところを一方的に報道した。勿論、中国側にも落ち度はあるし、対応の仕方にも問題があるのは先刻承知の上だが、それにしても報道は偏向気味である。これは単純に日本が輸入したのではなく、日本の会社が委託して管理も日本側管理を教育した上での話である。その後山東省の日本の会社が生産したものに農薬が含まれていたことは、報道はされたが数日で表に出なくなった。河北省の中国の会社で製造したギョウザだけが問題になっている。中国がずさんと言うなら、そこで暮らしている我々はどうなるのか。河北省のギョウザ問題も当初は委託業者である日

本の会社も表に出たが、その後は表に出なくなった。もしこれが委託でなく、そして製造会社が日本のだれが聞いても分かる有名な会社であれば、報道は必ずその有名な会社の名前が表に出ているだろう。その意味で報道という物も中立ではなく事実と間違いないが報道されていることだけが事実というのではない。その意味で報道も、先ほど中国は国益の為の報道、日本は真実を伝える報道と言ったが、必ずしもそうでないことが分かる。

食の安全に関する問題は、日本人のみならず、生きている人間に等しく平等で安全であるべきなのに、いつの間にか日本の食の安全の問題に全ての報道が変ってきてしまっている。

チベットに関する欧米の報道の仕方には異常なものを感じる。確かに現在の社会で暴力によって反対の考え方を抑えこむのは問題があるかも知れないが、人権問題をチベットだけに大きな焦点を当てるのは、やはり偏向と言わざるを得ない。中近東やパレスチナやコソボの問題なども良く考えるべきである。

私は、二〇〇八年五月に発生した四川省の大地震の報道は中国と日本、香港を見比べ